2017 年 12 月 3 日

福音書からのメッセージ

だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。
（マルコによる福音書 13 章 35 節）

今日は降臨節第 1 主日、教会では一年の始まりです。そしてその始まりのときに、イエス様の「目を覚ましていなさい」という言葉を聞きます。今日の短い福音書の中に、三度もこの「目を覚ましていなさい」という言葉が繰り返されています。この一年、この言葉を心の中に響かせながら信仰生活を歩みたいと思います。

ではこの「目を覚ましていなさい」とは、どういう意味なのでしょうか。数時間であれば「目を覚ましていなさい」と言われても何とかなりますが、数日、数週間であればとても厳しい命令です。しかしイエス様はご自分が再び来られるまで、「目を覚ましていなさい」と言われています。

イエス様はここで、肉体的な意味で目を覚ますように言っているのではありません。実はこの「目を覚ます」という言葉には、「気を配る」という意味もあります。

先日、幼稚園で卒園生のクリスマス会がおこなわれました。その日に合わせて園庭の飾りつけをしました。お昼頃に会が終了するのにあわせて、電飾に明かりを灯しました。しかし素晴らしい晴天の中、部屋から出てくる子どもたちはツリーを見上げるものの、電飾が点灯していることには気づきません。そのときにふと辺りが暗くなりました。太陽が雲の陰に隠れたのです。ある子がツリーを指さして言いました。「あれ、電気がついてるよ」、それを聞いて周りにいた人たちも、「本当だ」、「気づかなかったね」と口々に言い合います。わたしの目には、ずっと光は届いていました。

でもそれは、わたしがそこに光があるのを知っていたからなのです。

目も心も光の方向に向け、わずかな光を感じていた。だからわたしは、光を受け入れることができたのです。イエス様の「目を覚ましていなさい」という言葉も、同じように捉えたいと思います。

わたしたちが生きるこの世界には、様々な誘惑があります。いろいろなことに心を奪われていきます。その結果神さまから目が離れてしまい、その存在を見失ってしまうのかもしれません。それはまるで、子どもたちが園庭で小さな明かりに気づくことができなかったようなものです。

「目を覚ましていなさい」、それはしっかりと神さまに心を向け、心静かに、必ず来てくださると約束された方を待ち続けることです。わずかな光を感じることです。それがわたしたちに求められていることなのです。

この降臨節、神さまに心を向け、神さまが与えてくださる大きな恵みである、イエス様の誕生を迎えることができるように、祈っていきましょう。そこにイエス様は必ず来てくださいます。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町 184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/